

令和８年度第１回ぎふ清流文化プラザ評価員会議 議事要旨

○日時：令和８年８月１９日（水）１４：００～１５：３０

○場所：ぎふ清流文化プラザ ４階 第３練習室

○出席者：

【評価員】

市川篤丸、高橋順、谷口真由美、田村禎章、土本真弓、仲田久美子

【指定管理者】

常務理事 杉下尚、理事兼障がい者芸術文化支援センター長 田中誠司、事務局長 田上雅治、他職員４名

【事務局（岐阜県文化創造課）】

文化創造課長 大口英徳、文化施設企画監 児玉忠哲、文化施設係長、文化振興係長、文化施設係担当

【令和７年度事業実績に対する意見・評価】

<評価員>

- ・公演の選定基準について、公費を投入する事業である以上、企画の妥当性を示す根拠が必要と考える。指標の一つとして、県民の声(アンケート等から)、文化貢献度(芸術性、県民の生活に貢献度)、など、多角的な指標があるとより県民のニーズに答え、文化を推進する団体の意義があると考ええる。

<指定管理者>

- ・公演の選考は、公演ごとのアンケートで「今後見たいジャンルや出演者」の希望を集計し、複数の公演にわたって同様の要望が多く寄せられた場合に採択を検討している。ただし、最終的な決定にあたっては、出演者のスケジュールや小規模ホールでの公演に対する意向、出演料などの条件に加え、事業計画との整合性や近隣施設との企画調整も考慮する。

<評価員>

- ・選考基準としてアンケート以外にも明確な基準を設けることで、更に県民のニーズに応えられるようになるのではないかと思う。

<評価員>

- ・多様化する県民ニーズに対応しながら、多くの事業を幅広く、バランスよく展開できている。
- ・民謡公演や障がい者コンサートは収容率が60%台にとどまっているが、要因について分析しているか。

<杉下常務理事>

- ・障がい者コンサートは、ご家族など関係者の来場が中心となる傾向がある。関係者以外の方に来場いただくため、障がいへの理解を深めるための取り組みも必要と考える。
- ・民謡については、若い世代への普及が難しく、一定の壁があると感じる。
- ・いずれも広報の充実が課題である。

<評価員>

- ・包括外部監査の指摘事項である現金の取り扱いについては、規程を見直したのか。

<指定管理者>

- ・監査人の助言を受け、実態に合わせて会計処理規程を改正した。

<評価員>

- ・情報セキュリティに関しての研修対策について検討されているか。
- ・収容率100%となっている事業については、定員どおりの入場だったのか、それとも希望者が定員を上回り、入場できなかった方がいたのか。
- ・文化芸術事業は、単に集客数を目標とするものではなく、集客が見込めない場合でも公共施設として県民に文化芸術を発信していく姿勢が重要であると考えている。

<指定管理者>

- ・情報セキュリティについては、専門知識を持った職員を採用し、職員へセキュリティ研修を実施している。事故が起きた際、どのような対応が必要か確認を行っている。
- ・満席になっている公演については、窓口に来られた時点で既に完売していたなど、希望にお応えできなかったケースもある。

<評価員>

- ・自主企画事業の3本柱については、施設の基本コンセプトに対応する形で位置づけているのか。「清流プレミアムセレクション」は基本コンセプトと結びつきがあるのか。

<指定管理者>

清流プレミアムセレクションについては、一流のアーティストに触れる機会を提供することを目的としている。また県ゆかりのアーティストへのつながりを作り次へ繋げるための「次世代の文化芸術の担い手育成」の側面もある。

<評価員>

- ・一流アーティスト招聘事業は、集客や収益の確保を目的とする性質が強いと考えられる。文化芸術事業を継続的に実施するためには、本来取り組むべき事業に加え、それを支える集客型・収益型の事業も必要となる。そのため、本事業の位置付けとして「集客型・収益型事業」であることを方針の中に明記すると、その公演を実施する意義がより伝わりやすくなるのではないかと感じた。
- ・その他の取り組みとして、清流合唱団を運営しているとあるが、団員はどのように選考しているのか。

<指定管理者>

- ・団員の募集は随時行っており、経験不問でどなたでも参加いただいている。月3回程度の練習を実施している。
- ・また、残念ながら清流合唱団は今年度3月に解散することが決定している。

<評価員>

- ・収益という観点では、人気のあるアーティストの招聘により一定の成果が期待できる。幅広いニーズに応えることで、来場者数や収益の底上げに繋がると思う。
- ・障がい者の発表の場については、ご家族や関係者だけでなく、より多くの方に関心を持って来場してもらえるような取組に力を入れてほしい。障がいへの理解を深める機会を広げることが、社会の多様性につながるのではないと思う。

<評価員>

- ・「ぎふ清流座 能楽公演」については、収容率100%の満席であるが、無料にする必要はあるのか。

<指定管理者>

- ・能楽公演については令和7年度が初めての実施となる。地芝居については、育成や集客への懸念もあり、無料としてきたが、演者側からも有料化を望む声もあったことから、岐阜県と協議のうえ、今年度から有料化した。しかし結果として満席には至っていない。
- 今後も公演を継続し、出演団体の活動支援や伝統文化の育成・継承につなげていきたい

と考えている。まずは低額な入場料から始め、その収益を出演団体へ還元していきたい。

- ・なお、昨年度に「無料公演が多いのではないか」との意見があったことを踏まえ、料金設定については現在見直しを進めている。

<評価員>

- ・障がい者、高齢者、小さなお子さんなど、誰もが参加できるよう幅広く門戸を開くことをコンセプトとすれば、サラムンカホールとの差別化が図れ、個性を出せるのではないかな。たとえば、能楽を子どもたちが体験できるような、参加型の公演など良いと思う。
- ・合唱団の運営を終了するという話について、練習場所の確保や運営面での負担は理解できるが、少人数でもきれいに響くホールであるので、子どもたちが文化芸術に親しみ、成長していける場として活用されることを期待する。

<評価員>

- ・公共施設としては、収益性にかかわらず、無料で一流の文化芸術に触れる機会を広く県民に提供すべきであるが、現実には運営を維持していくための収益確保も必要であり、近年の花火大会の有料化などを見ても、有料化は時代の流れの一つといえる。
- ・同じアーティスト公演でも、大規模ホールと小規模ホールでは異なる楽しみ方がある。施設の規模や特性を生かした独自の取組により、他施設との差別化を図ってほしい。

<評価員>

- ・財団として、若い世代に対し金銭的な支援だけでなく、発表の場の提供や活動機会の創出などの支援は可能か。
- ・障がいを抱えながら社会で活躍している方の講演会を開催し、社会で生きていくための知恵や学びを得る機会を提供するのも良いと思う。

<指定管理者>

- ・指定管理事業ではないが、「みらいフェスぎふ」において小中高生の合唱やダンスの発表の場を作るなどの取り組みをしている。
- ・文化団体への助成もしており、約 150 件の団体に対し計約 2,500 万円の支援を行っている。
- ・さらに、TASC ぎふ（岐阜県障がい者芸術文化支援センター）では、障がいのある方の発表の場を提供している。このほか、ふれあい会館 2 階のよはく美術館では、若手作家や障がいのある作家の作品を展示し、創作活動の支援に取り組んでいる。